

茨木市文化財資料集 第11集

# 上寺山古墳

発掘調査概要



1972・3

茨木市教育委員会  
茨木市文化財研究調査会

## はしがき

茨木市は京阪神の要路に位置し、早くから人々の生活の舞台として繁栄し、貴重な文化財が数多く残された“まち”です。これらの文化財を保護し、市民生活に役だて、正しく後世に伝えていくことは、私たち現代に生きる者の責務と言わねばなりません。

上寺山古墳は名神高速道路建設工事に伴って発見され、昭和36年に緊急調査を実施した結果、竈塚とよばれる特異な構造を持つ全国にも例のすくない古墳であることから一躍注目を集めたのです。調査の結果は『日本考古学年報』や『茨木市史』などで断片的に公表されてはいるものの、未だ調査の全容は公刊されていなかったため、『茨木市文化財資料集』として上寺山古墳発掘調査の概要を発刊し、多くの方々の参考に供したいと思えます。

本概要を刊行するにあたり心よく執筆をひきうけられた田代克己氏と、資料を提供くださった野口覚氏、調査に参加していただいた方々、本市文化財研究調査会委員の皆様へ感謝の意を表します。

茨木市教育委員会

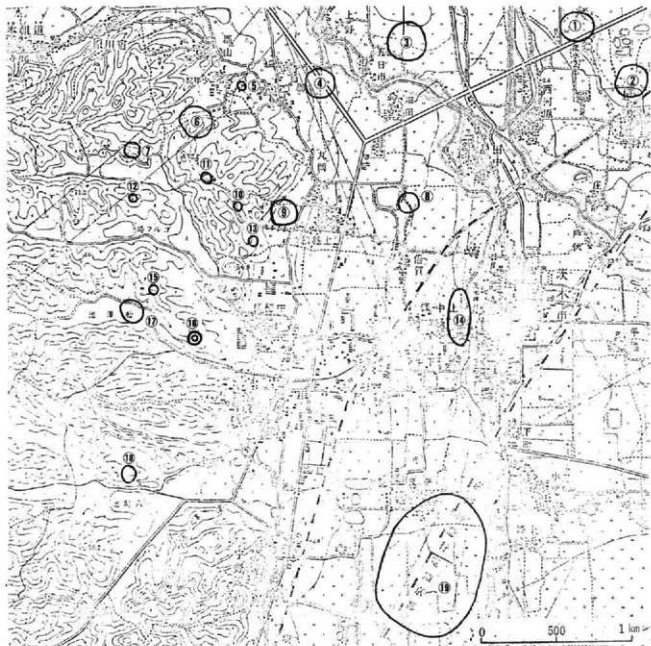
教育長 重富敏之

---

調査主体 茨木市教育委員会

調査参加者

水野正好	大阪府教育委員会（現在）
喜谷美宣	神戸市立考古館（"）
西谷 正	福岡県教育委員会（"）
田代克己	大阪府教育委員会（"）
村上紘揚	兵庫県教育委員会（"）
八木久栄	大阪市立博物館（"）
秋山倭子	同志社大学（当時）



1. 太田道跡 2. 総持寺道跡 3. 耳原道跡 4. 郡道跡 5. 郡神社古墳 6. 郡山古墳群 7. 地蔵池南道跡 8. 信賀道跡 9. 総持庵寺 10. 上穂積神社古墳 11. 上穂積山古墳 12. 茨木ゴルフ場跡跡 13. 見付山古墳 14. 中條道跡 15. 松沢池北道跡 16. 上寺山古墳 17. 松沢池底道跡 18. 山田銅鑛出土地 19. 東奈良道跡

## 古墳の位置

大阪府の北西部には、茨木市、摂津市、吹田市、豊中市、池田市、箕面市にまたがって千里山丘陵と呼ばれる広い洪積台地が存在しますが、この上寺山古墳は、その東北端に近い、茨木市下穂積の上寺山と呼ばれる丘陵の頂上近くで発見されたものです。

名神高速道路は、この北南から南東に長く延びた上寺山の丘陵をよこぎって建設されていますが、この高速道路の南側わずか10m離れた地点で発見されたものです。

## 調査の経過

大きく土取りされた炭の頂上付近に、巾約3mにわたって焼土の露出しているのがみられ、最初は須恵器を焼いた窯跡であろうと考えました。しかしすでに盗掘によって出土している物をよくみると、須恵器はすべて完形品であり、多くの河原石や、鉄釘が出土していることから、簡単に須恵器窯跡と定めることはできなくなったのです。なぜならば、もし須恵器の窯跡ならば、完全な形をしたものよりも、むしろ焼けひずみのあるものや、破片が多くみられるのが普通で、鉄釘や多くの河原石が出土することは、ほとんどないと言ってよいものだからです。

こうして調査以前に知ることができた事実から、この遺跡は、須恵器を焼いた窯跡などではなく、丸太を組んで骨組とし、土をスサをまぜた粘土でぬり固めて部屋を作り、中に埋葬した遺体もろとも火をかけた、窯塚と呼ばれる特殊な古墳であると判断されたのです。

炭に露出している焼土をよく観察してみると、その両端はうすく中央部が厚く、全体にカマボコ状になっていることが認められました。この焼土の露出している崖面を、そのまま断面観察のための畦として残し、他の部分はすべて焼土が出て来るまで、上の土を除くことにして、発掘を開始しました。こうして焼土を追求した結果、この崖面から、巾約3mで、北に約4m焼土の続くことがわかり、崖面と同じ様に全体がカマボコ状になっていることがわかりました。断面観察のために残した畦の東半分には、焼土面にそって4本分の墓室をつくる骨組とされた丸太の焼け残った炭が並んでいるのが知られ、また墓室は、巾約3m、長さ約5m、深さ約1.3mの山に掘りこまれた長方形の土坑の内に組まれていたことも明らかになりました。

この焼土の平面図と断面図をつくった後、まず西半分から焼土を取り除く作業を開始しました。焼土の多くはかなり大きな塊となっていて、中にスサが入っているのが認められ、現在の土壁と同じ様に築られたものであることがわかりました。

全体の焼土を取り除いた結果、床に河原石が一面に敷かれ、その上に合計3つの木棺が納められていたことが明らかになり、第2号棺と第3号棺は、棺の一部が炭になったまま残っていることも明らかとなりました。

墓室のつくられた土坑の周囲を調べた結果、骨組みとして周囲から並べられた丸太の痕跡をみつけることができました。北側では15本、東と西はそれぞれ20本の丸太が、しっかり埋めこまれていたことが明らかとなり、北側中央部の4本が直立している以外は、60～70度の角度で立て並べられていたことも明らかとなったのです。また土坑の内部には柱が立てられていたこともわかり、まず柱を立て上に梁をわたし、周囲から丸太を立てかけて骨組みとし、全体にスサをまぜた粘土を塗って墓室をつくったことが明らかとなったのです。

- ① 盗掘で荒らされた部分や上部の土を除いて焼土だけを露出させた状態。

手前の土器は盗掘により調査前に掘り出されてしまったもの。



- ② まず中央部西半分の焼土を除いた。床面に敷かれた河原石などが現われる。



- ③ 炭になった木棺が残っていることが明らかとなった。敷石の上には木棺に使用された鉄釘などが残っている。





- ④ 断面の実測図をつくった後、東半分も焼土を除いた。敷石のなかには、一かかえもあるものがあって、棺をのせる台として使われたと考えられるものもある。



- ⑤ 周囲からは直径10cm～15cm前後の小さな穴が並んでみつき、まわりから榎木を立て並べた構造のものであることが明らかとなった。



- ⑥ 東側では、ほとんどそのままの状態で榎木が炭になって残っているところが見つかった。

- ⑦ 奥の部分を残して焼土を取り去った状態。東半分は炭になって残った木棺がみられる。

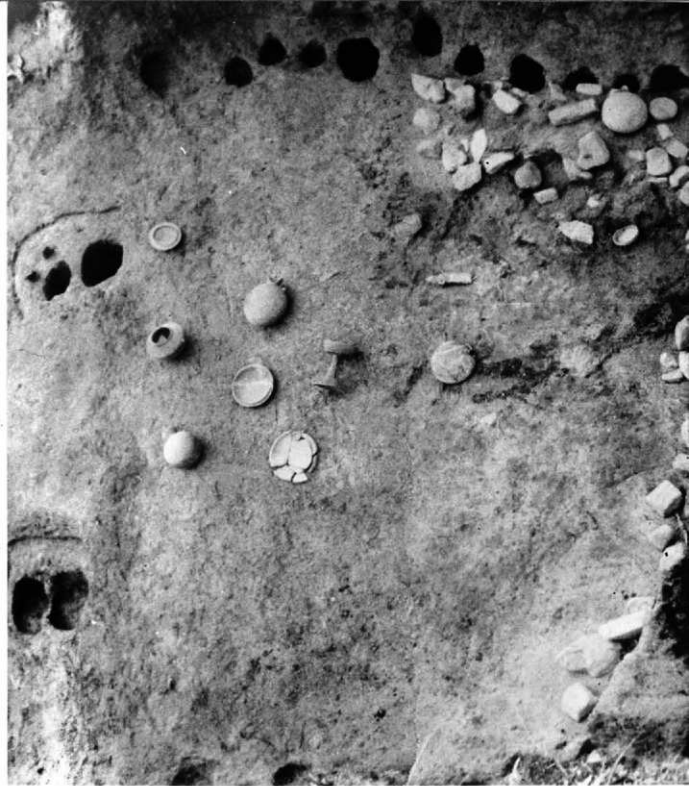


- ⑧ 周囲の樺木の小穴がはっきりした。ほとんどが60度～70度の角度で立て並べられていることが明らかになった。



- ⑨ 西側からの全景。





⑩ 焼土をすべて取り去った状態での全景。

北側中央の小穴は4本だけがほぼ直立しており、煙出しと考えられる。

南側では、同じ穴に埋め込まれた2対の柱穴がみつき、構造復原のための大きな手がかりとなった。





⑩ 焼土をすべて取り去った  
状態での全景。

北側中央の小穴は4本だ  
けがほぼ直立しており、煙  
出しと考えられる。

南側では、同じ穴に埋め  
込まれた2対の柱穴がみつ  
かり、構造復原のための大  
きな手がかりとなった。

- ⑪ 北側中央の直立する4本の  
榎木穴と、遺物の出土状  
態。敷石の下にも土器など  
が入っていて、埋葬は一時  
でなく、時間をおいて行な  
われたものと考えられる。



- ⑫ 棺台に使われた石、炭に  
なった木棺、土器などの出  
土状態。



- ⑬ 西側からみた木棺などの  
出土状態。





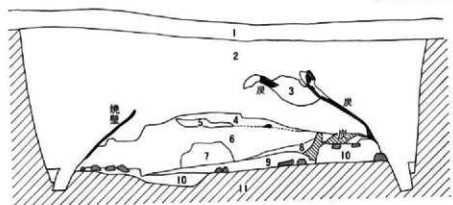
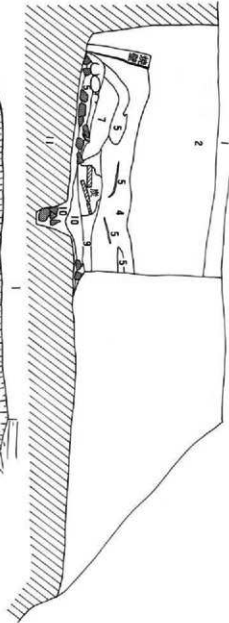
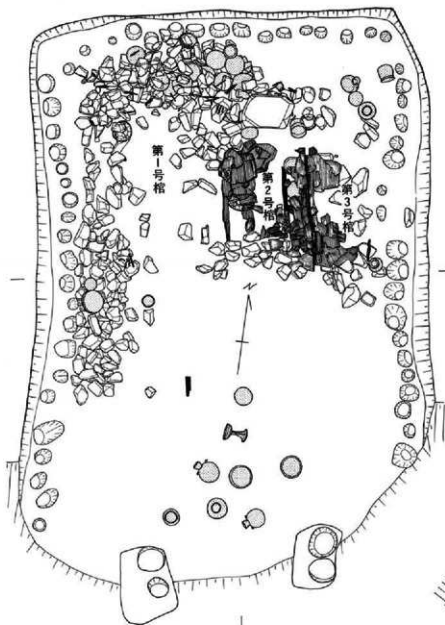
⑭ 南側からみた木棺などの出土状態。



⑮ 南側からみた第2号棺の細部。西側板の上部が折れて内におれ込んでいる。

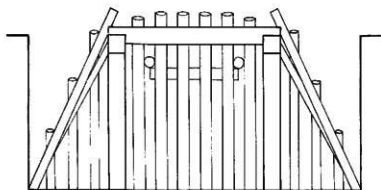
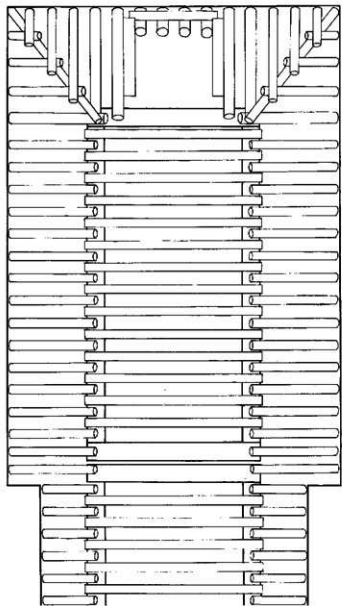


⑯ 西側からみた第2号棺の細部。木口板と西側板とは鉄釘が打たれたまま残っていた。



1. 表土
2. 黄色砂質土(淡青灰色、橙色粘土混)
3. 赤色焼土
4. 焼土
5. 暗赤褐色土
6. 焼土
7. スサ混り焼土
8. 炭混り暗赤褐色土
9. 焼土
10. 淡黄褐色粘土
11. 橙色粘土(地山)

上寺山古墳遺構実測図



上寺山古墳墓室木組復原図



兵庫鎮



鎧鈎金具



鎧鈎手



帶



鉄錐



鉄釘



鎧



刀子



鉄刀

## 出土遺物

出土した遺物には、須恵器、土師器、鉄刀鉄鏃、鉄刀子、鉄製馬具、滑石製紡績車などがあり、また炭化した棺材の一部と木棺に使われていた鉄釘、鉄鏃などがある。

その出土の状態を詳しく観察してみると、一セットになる土器の蓋と身とが離れていたり、敷石の下から出土したり、もともと一つのものであったはずの馬具が、かなり分散した状態で発見されたりしていて、三棺が墓室に納められたのは多少時間的な差があったと考えられます。



蓋付罎



脚付盃



小形罎



盃



子持壺(部分)



高杯



提瓶



平底



土師器杯



重杯



土師器小形壺



上塚の内側に立てられていた4本の柱や、周囲からみつかった丸太の痕跡から、この上寺山古墳の築室は次の様に復原できると考えられます。

まず地上に巾約3m、長さ5m以上、深さ約1.3mの長方形の上塚が掘られ、内に4本の柱が立てられる。この柱の上に梁が渡され、この梁に向かって60～70度の角度で周囲から丸太が立てかけられます。梁と梁との間にも丸太が渡され、次にスサをまぜた粘土が塗られて築室が作られたと考えられます。

さらに土塚内に立てられた柱の内、両側の柱穴には、それぞれ2本の柱が立っていたことが明らかになっていますが、大きく土取りされてしまった部分に、それぞれ対応する2本の柱が立てられていたかと推定され、築室と同様に梁をわたし、周囲から丸太が立てられ、梁と梁との間にも丸太をわたして、後に焚口となる部分がつくられていたと考えられます。

この様に築室を復原してみると、木と土とで作られているようですが、当時流行した横穴式石室と呼ばれる石室をもつ古墳と、大変よく似ていることがわかります。

横穴式石室は普通築室と墓室に至る羨道と呼ばれる通路から出来ていますが、材質のちがうことを除けば、まったくそっくりの構造であることがわかります。

この上寺山古墳の場合、遺物の出土状態から3棺が同時に埋葬されたのではなく、ある程度時間を置いて墓室に運びこまれたと考えられますが、横穴式石室が家族墓として、何年にもわたって次々と死者を埋葬して行っていることともあわせて考えれば、ますますその類似性が強くなります。

最近の調査例まで含めても、全国的にみて数えるほどしか発見されていない同様の構造をもった古墳の内には、一度埋葬が行なわれ、火がかけられた後にも追葬が行なわれ、それには火がかけられていない例や、同じ様な構造をもちながら、まったく火のかけられた痕跡のないものもあって、埋葬にあたって必ずしもすべて火がかけられたものばかりであったとは言えない様です。

遺体を火で処理しているところから、仏教による火葬を考える人もいますが、日本で最初に文獻にあらわれる火葬は、西暦700年の僧道照であり、上寺山を含めてこれらの窯塚はおよそ西暦600年頃のものとして推定され、もし仏教によるものとするれば、100年も古くなることになります。

仏教による火葬は、遺体を火で処理した後、骨を別に用意した容器に入れて埋葬することに重要な意味を持っています。

遺体を火で処理した後そのままにしている窯塚の場合とは、かなり異なったものと言える様です。また窯塚の内には、同様の構造でありながら火をかけていないものや、追葬されたものには火をかけていないものもあることを考えれば、ただ遺体を火で処理しているからと言う理由で簡単に仏教による火葬だと決めてしまうよりは、何か別の特殊な理山をさがすべきだと考えられます。

上 寺 山 古 墳

茨木市文化財資料集第11集

昭和47年3月

著 者 田 代 克 己

発 行 茨 木 市 教 育 委 員 会  
茨 木 市 文 化 財 研 究 調 査 会

印 刷 理 工 社